

「また君に会いたい」

東京都 池田尚広

僕と彼は同じ保育園を出た。小学校は別々だが、彼の父親が近所で婦人服の店を営んでいることもあり、卒園後もよく遊ぶことがあった。ある日その洋服屋を訪ねると彼の父親が言った。「健太ね、野球始めたから日曜日あんまり一緒に遊べないかもしれないなあ。」それから彼と遊ぶことはなくなった。

数年して、中学校で野球を始めた僕は、隣の中学で野球部に所属していた彼と再会した。3年間、多く言葉を交わすことはなかったが、保育園以来、僕のことを「なおくん」と呼ぶのは彼以外にいなかった。だから試合で彼のプレーを見ると強い親近感を感じた。

高校に入り、僕も彼も野球部に入った。以前と同様、学校は違えど対外試合の際に顔を合わせることが少なからずあった。高校1年の秋、球場の通路で「なおくん」と声をかけられた。僕と彼は互いに二桁の背番号を見せ合いニヤニヤした。

夏の大会が始まり、各校の選手名が掲載されている冊子から、彼を探した。彼はいなかった。夏を待たずして野球をやめてしまったのだろうか、残念な気持ちでいた。また機会があれば、あの洋服屋を訪ねようと思った。そこに行けば、またきっと彼に会える。

その機会を待たずして辛い報せが届いた。「健太君ね、目が見えなくなったんだって。」その時の母の声には少し迷いが感じられた。僕はどう返答したらいいのかわからず「ああ、そうなんだ」とだけ返した。

思いも寄らなかった幼馴染の報せに、何を思うべきなのかわからず、ただただ冷静に事実だけを受け止めていた。球場で背番号を見せ合ったあの日から、彼とは会っていない。もう会わないのかな、とも思う。あの洋服屋に行けばいい、ただそれだけなのに、僕は彼と話をすることを恐れている。僕は臆病だ、本当にごめん。せめてここに書かせてほしい、僕は君に会いたい。